

主イエス命名の日

2011/1/1

聖ルカによる福音書第1章15節~21節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

皆さん、新年明けましておめでとうございます。皆さまとご家族の今年の歩みの上に、神さまの祝福が豊かにありますよう、お祈り申し上げます。本年もよろしくお願いいたします。

日本ではクリスマスが終わると、お店でも家庭でも、クリスマスの飾りを直ぐに片付けて、替わって門松を立てて新年を迎える準備を始めます。アツと言う間に町の中も家の中も景色が一変しますので、その変わりようの素早さに、毎年、驚くのですが、新年を迎えるということを、大事なこととして受け止めていることが良く分かるわけです。

おそらく、お正月の三が日は、初詣でどこの神社も寺院も大賑わいすることでしょう。たとえ1年に1回だけのお参りであったとしても、そしてその動機には自分と家族のことが中心を占めているのですが、1年の無事・平安を祈る心が多くの人々の中に未だ残されていることに不思議さを感じます。人間の力ではどうにもならないものがあることを感じ取っているのでしょうか。

人間は、大自然の時間の流れの中で生活していく中で、四季の移り変わりを実感し、自然の持つリズムを感じ取り、時の廻りに周期のあることに気がついてきました。そこから種々の暦を編み出して、それに基づいて生活を送るようになっていきました。

月の満ち欠けに基づく太陰暦が多くの国で用いられてきましたが、太陽の周期をもとにした太陽暦が最も早く造られたのはエジプトだと言われています。紀元前4000年頃には、1年を既に365日に近いものとして計算していたようです。

どうしてエジプトで太陽暦が発達したのでしょうか。それは、ナイル川の氾濫と関係していました。当時の生活は農業中心の生活でした。人々は、作物を植え付ける時期や収穫する時期を知る必要がありました。ナイル川の氾濫によって農地が潤され豊かな実りがもたらされたのですが、毎年、ナイル川の水が増し始める夏至の頃に、太陽と一緒にシリウスが東の空に現れ始めることに気がつきました。それに基づいて、1年の長さを割り出し、導き出したのです。

古代のローマでは、ローマ建国を元年とする年代の数え方がありました。また皇帝の即位の年から年代を数える数え方もありました。福音書にも「皇帝ティベリウスの治世の第15年」という数え方がでてきます(ルカ3:1)。

これは、日本の暦でも同様です。今年は皇紀何年になるのでしょうか。私が生まれるより何年か前に、「紀元は2600年」というお祝いの年があったようです。今、70歳の方は、その年の生まれだと思います。さすがに皇紀を使う人は少なくなりましたが、しかし、天皇の即位の年を元年とする邦暦(和暦)の数え方は、それを支持するか否かは別にして、日本人の間で親しまれていることは事実です。明治、大正、昭和、平成という天皇の在位の期間によって歴史を区分する見方が行われていますし、自分の生まれた時代に郷愁を憶えたりもするわけです。「明治は遠く

なりにけり」という言葉が、かつて一時、流行ったことがありますが、元号がその時代の特徴を表したり、その時代の人々の共通するものの考え方の特色を表したりするわけです。

日本以外でもユダヤ教では、天地創造のときを紀元とする暦が使われます。一日は日没から始まって翌日の日没までですし、1年は西暦の9月ないしは10月から始まります。因みにユダヤ暦では、今年(5771年)になるはずですが、イスラム教でもマホメットがメッカからメディナへ移った年(西暦 622 年)を元年とする暦が用いられています。

教会でも主教按手の年から年数を数えるという仕方があります。パウロ教会のこの聖堂の「聖別の証」という額が横の柱に掲げられていますが、そこには当時の後藤眞主教の名前で「救主降生1974年わが聖別の16年1月15日わが名を署し印を捺し以て聖別の証とす」と書かれています。「わが聖別の何年」という数え方です。多少、アナクロニズムの匂いがすると言ったら叱られるでしょうか。

それぞれの国や地方また宗教によって、国の始まりのときや、支配者の統治を基準として、また宗教的な意義深い出来事を出発点として暦が考えられてきました。

そのようないろいろある暦の中で、私たちは信仰に基づいて、イエスさまが人となられたその時を中心として時間を数えることをするようになりました。初代の教会は、主の再臨が近い、今にでも再び主は来られると考えていたので、特別な暦をつくる必要がありませんでした。しかし、毎年復活祭を祝ったり、殉教者たちの記念日を守ったりすることが大切にされていく中で、特に復活日は移動祝日であるために、毎年、日付が変わります。そこで毎年の復活日を、予め何時になるか計算することが、教会の大事な仕事になりました。このようなことから教会の礼拝との関係で、次第に暦が整備されていくことになります。

そして6世紀になって、イエスさまの誕生の年を元年とするキリスト紀元が、ディオニシウスという人により考案され、徐々に普及していくことになりました。ディオニシウスは次のように言っています。「我々はもはや暦年を統治者によっては数えない。彼らは君主ではなくて暴君だからである。我々はもはや不信仰な者や迫害者とは結びつたくはない。むしろ、我々の主イエス・キリストの受肉から数え始める。これは我々の希望の始まりだからである。」(『暦とキリスト教』より)

イエスさまが肉をとって人となられた事実をもとにして暦を数え始める。なぜならそこから希望の年は始まったからだということです。

今日1月1日は、イエスさまが律法の規定に従って、生まれて8日目に割礼を受け、天使が告げたとおりその名をイエスと名付けたことを記念する日です。新年を迎えても教会は、主イエスさまのご降誕によって、神さまが人間を救おうとされる決意が現実となったことを祝うのです。もう一つのクリスマスである顕現日(1月6日)まで、ご降誕の大きな喜びの時は続きます。

イエスという名は旧約のヨシュアと同じ名前です。ハヤウエは救い、神は救いである、という意味です。この名によるほかに救いはないといわれた名前です(使徒言行録 4:12)。そのような恵みが与えられたときを起点として、人間の歴史を数えることにしたのです。旧約時代の人々が待ち望んだメシアの誕生、長い準備の期間

を経て「ときが満ちて」(ガラテヤ 4:4)神さまの救いの計画が実現するその時です。それが主の年(anno Domini、略して A.D.)です。神さまの恵みのみ業が始まって、今年はその2011年を祝います。

ルカ福音書は旧約聖書を引用して、イエスさまは「恵みの年を告げるため」(4:19)に遣わされて来られたと宣言しました。そして、貧しい人に福音が、捕らわれ人には解放が、目の不自由な人に視力の回復が、圧迫されている人の自由が告げ知らされ、そして「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(4:18、21)と証しするのです。

ご降誕日にお2人の方の洗礼式が行われましたが、その終わりの方で、会衆が言った言葉の中に、「ともにキリストの祭司職にあずかる者となりましょう」という受洗した方に対する呼びかけがありました。洗礼を受けてキリスト者になった者は、キリストの持っている祭司としての務めを行うものなのだとを確認したのです。

祭司の務めとは何でしょうか。祭司には2つの面があります。1つは民を代表して神さまに執り成しを行うことです。旧約の祭司は、そのために神殿でもって犠牲の動物を捧げ、罪の贖いを祈りました。

もう1つの面は、今度は逆に神さまの側に立って、民に対して祝福を告げることです。エルサレム神殿の正統な祭司は、モーセの兄弟アロンの系統とされましたが、民数記には「アロンの祝福」と呼ばれる言葉が残されています。「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けて、あなたに平安を賜るように」(6:24-26)。祝福の最終的な目標は平安・平和です。執り成しと祝福、その2つが祭司の務めです。

新しい年、2011年の到来と共に私たちが祭司の務めに生きるということは、この世界の中でどのような働きをすることなのでしょう。わたしたちの身近にある具体的な課題は、神さまの前に執り成しを必要としている課題は何でしょうか。そしてその課題にどのように取り組んだら良いのでしょうか。そしてまた、神さまの祝福・平和を渇きを持って待ち望んでいる人々に、わたしたちはどのように福音を宣べ伝えたら良いのでしょうか。この元旦に改めて思い巡らしてみたいと思います。そして私たちのささやかな奉仕が主の祝福のもとで大きな実を上げることができるようにと祈りましょう。

皆さんの新しい年の歩みの上に聖霊の導きが豊かにありますように。